どうとく発問ラボ 島先生と考える!! どうとく発問ラボ×道徳オンラインセミナー

今年もコラボ開催！

「どうとく発問ラボ」は、教材の発問を島先生と実践者の先生との対談形式で考える動画コンテンツです。ご好評につき、今年度も昨年度に引き続き「どうとく発問ラボ」と「道徳セミナー」をコラボで開催。「どうとく発問ラボ」で検討した発問を使った模擬授業を「道徳セミナー」でご覧いただけます。よりよい授業づくりのご参考に、ぜひ「どうとく発問ラボ」をご視聴いただき、「道徳セミナー」にご参加ください！！

どうとく発問ラボ
日文 web サイトで動画公開

2022 年 10 月中旬　中学校「独りを慎む」
11 月中旬　小学校「うばわれた自由」

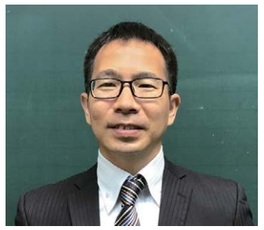
発問ラボで検討した発問で模擬授業！

道徳セミナー
オンライン＋対面（沖縄）で開催

2023 年 1 月 14 日（土）　13：00 ～
小・中の模擬授業、指導講評、島先生講演

※開催形式は、変更になる可能性があります。

●小学校「うばわれた自由」
新垣 博也 先生
沖縄県那覇市立
開南小学校教諭



●中学校「独りを慎む」
比嘉 さつき 先生
沖縄県うるま市立
高江洲中学校教諭

●小・中学校
島 恒生 先生
畿央大学大学院教授

深い学びのある授業づくりの参考に、ぜひ、ご視聴ください！

「どうとく発問ラボ」の視聴、「道徳セミナー」参加申し込みはこちらから。
※セミナーのお申し込み受け付け開始は、12 月の予定です。

どうとくのひろば　読者アンケートにご協力ください！

よりよい広報資料をお届けするため、先生のご感想、ご意見を左の QR コードからぜひお聞かせください！

どうとくのひろば No.32

日文教育資料［道徳］
令和4年（2022年）10月15日発行
編集・発行人　佐々木秀樹
発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

編集協力：株式会社ストア
デザイン：モスリングラフィック

CD33606

日本文教出版 株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5　TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171
東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16　TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618
九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14　TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938
東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B　TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261
北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1　TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690

日文教育資料［道徳］

どうとくのひろば

No. 32

こころのひろば
語り継がれる物語が
命を守る礎となる
［﨑山 光一］…… 2

特別寄稿
もう一歩先のイマジネーションを
膨らませて考える道徳
―指導者用デジタル教材の
活用から見えたもの―
［川田 聡子］…… 6

見てわかる！ 道徳
「友情、信頼」
「規則の尊重」（小学校）
「遵法精神、公徳心」（中学校）
［越智 貢、奥田 太郎］…… 8

実践事例【小学校 4 年】
正直
～自分に負けない強い心を育てる～
［神山 庄太、島 恒生］……10

こんなコト、聞いてみました！
授業 1 時間内での、
時間配分の工夫は？
［木村 知広］……14

地球の仲間からのメッセージ
ラクダ
［長瀬 健二郎］……15

本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ！
日文　検索

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

※本冊子掲載QRコードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
※QRコードは、株式会社デンソーウェーブの登録商標です。

こころのひろば

崎山（さきやま） 光一（こういち）

Profile

稲むらの火の館（濱口梧陵記念館・津波防災教育センター）　館長

「稲むらの火」を伝承する語り部の活動を経て館長に就任。濱口梧陵の物語や功績、津波防災について伝え続けている。防災に関する講座の開催や各地での講演活動も行っている。

【稲むらの火の館】
https://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/

語り継がれる物語が命を守る礎となる

関連するSDGs目標

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
9 産業と技術革新の基盤をつくろう
11 住み続けられるまちづくりを

高い防災意識を育むまちづくりに大きな役割を果たしている「稲むらの火」の物語。モデルとなった濱口梧陵（はまぐちごりょう）の先を見据えたまちづくりについて、「稲むらの火の館」館長である崎山さんにお話をうかがいました。

「稲むらの火」は、襲い来る津波から村人を救うために奮闘した五兵衛の物語です。和歌山県の広村（現在の広川町）で起こった安政大地震（1854年）による津波の際の濱口梧陵の行動が基になっています。

「稲むらの火」の物語は、町の人たちにとってどのような存在なのでしょうか？

尋常科用の小學國語讀本やラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の『A Living God』で知られる「稲むらの火」の物語を、この町で知らない人はいないでしょう。主役である五兵衛のモデルとなった濱口梧陵を、町の人たちは親しみを込めて「梧陵さん」と呼んでいるくらいです。教科書で勉強したり、「稲むらの火の館」へ何度も訪れたりと、子どもたちにとってもこの物語は身近な存在です。物語を知る方に、「濱口家があったという高台はどこですか？」と聞かれることがあるのですが、「史実はお話と違うんです。家は高台ではなく海に近いこの場所（濱口梧陵記念館）にあり、本人も第一波の津波被害に遭っているんです。」とお話しすると皆さん驚かれますね。実際は第一波が引いたあと、どうにか避難した梧陵さんは、がれきが散らばる暗闇の中で方角を見失った村人を、高台の廣八幡宮へと誘導するために稲むらに火をつけたんです。梧陵さんのこの行動もあって、このときの津波では村人の約97%もの人が助かったとされています。

それだけの人が助かったのは、避難を呼びかけた梧陵さんへの信頼と人柄によるものでしょう。ヤマサ醤油という大店の主人で大地主、村人からすると雲の上の人のような存在だったにも関わらず、皆に「濱口の旦那さん」と慕われていました。というのも、道で村人に出会ったら必ず「ご苦労さん。」と声をかけ、自らが水田の中に足を踏み入れて道を譲る、という優しい人なんです。また、いたずら好きの面もあったといいます。そんなエピソードや史実も含め、大切な物語として親子三代四代にわたってテーブルに乗せるべき話題だと思っています。

海岸沿いにある「広村堤防」の建設も梧陵さん主導によるものなんですよね？

津波の翌年、1855年に着工し、1858年に完成した、高さ5m、根幅20m、延長600mの堤防で、国に史跡指定されています。梧陵さんが私財を投じて造ったもので、実際に昭和南海地震（1946年）の際には村人を守ってくれました。梧陵さんが堤防を造る目的というのが、1つ目は防災対策、2つ目は就労対策、3つ目は広村の年貢の平均値を下げることによる経済対策なんです。近年になって新たな記録が見つかり、堤防の中に埋め込むことによる、がれき処理も兼ねていたということがわかりました。まさに、現代の復興モデルを先取りしていた形になります。勝海舟や福沢諭吉とも親交があり、佐久間象山の門下生であっ

広川町役場前には物語のワンシーンを再現した像がある。

濱口梧陵
広村で濱口家の分家に生を受ける。12歳のときに本家の養子となり、その後銚子にあるヤマサ醤油の当主となる。帰郷していた際に安政大地震に遭遇した。

避難場所となった廣八幡宮。稲むらの火祭りのたいまつ行列のゴール地点でもある。

刈り取った稲わらを積み重ねた稲むら。

た梧陵さんは、広い視野と鋭い先見性をもって物事を見ることができる人でした。現代なら多方面の人々が携わって計画・実行するような大事業を、一人でやり遂げたんだなと感じます。

しかし、何よりもまず梧陵さんが考えたのは村人の心でした。災害に遭ったことによる疲弊はもちろんですが、生活の困窮や先行きの不安による精神的な疲れも大きかったと思います。毎日仕事があり、その日の帰りには日当を現金でもらえる、これからも生活していける、という希望を与えるための堤防工事だったんだと思います。生活を支援するだけなら、お金を配るのがいちばん簡単でしょう。しかし、ただ配るだけなら無くなればまた頼らなければならない。だからこそ、仕事の場を提供することで、自分たちで村を守っていくんだという意識を植え付ける目的もあったんだと思います。そして、当時の堤防は土を盛っただけのものなので、雨に流されてしまうんですね。だから、一年に一回、村の人たちが必ず一軒に一人は出て、土を盛り直して元通りの高さに修復していました。それが、今の津浪祭へとつながっているんです。

「津浪祭」と「稲むらの火祭り」という2つの祭りの役割は大きいですか？

「津浪祭はメモリアル、稲むらの火祭りはフェスティバル。」2つの祭りについて私はこう表現するんです。

津浪祭は小学6年生と中学3年生が参加します。参加者それぞれが一握りの土を堤防に盛って、津波による死者への鎮魂と今後の安全を祈願します。その行動によって一人ひとりが防災の意味を考え、心に留めておいてもらえたらいいと願っています。その後の式典では、町長をはじめとする主催者や来賓ではなく、子どもたちが中心に並びます。テレビや新聞の取材が入るような式典で、子どもたちがメインとなることでより意識が高まっていくのではと思っています。

稲むらに火をつける火祭りは、たいまつ行列を組んで練り歩く祭りで、にぎやかさや勇壮さがあり、楽しむという面があっていいと思います。コロナ前には、世界津波の日サミットで海外の高校生二百数十名と引率の先生たちに参加してもらったりもしました。防災意識の向上はもちろんですが、地域の交流や発展の意味もありますから。そして、どちらの祭りからも、梧陵さんや町の人の思いを感じ取ることができるでしょう。それらが思い出として残り、たとえこの地を離れたとしても、いざというときに防災の意識として喚起されれば、大切な命を守ることにつながるんです。

約2㎞にわたってたいまつの火が連なる「稲むらの火祭り」。

「津浪祭」では堤防の上で手を合わせ、当時へと思いをはせる。

費用のほとんどを濱口梧陵が負担して築かれた広村堤防。

「稲むらの火」の逸話に由来する「世界津波の日」について教えてください。

安政の津波が起こった11月5日が、「世界津波の日」と制定されました。世界には津波に関する知識をもたない人も多いというのが現状です。スマトラ沖地震（2004年）のときには、引き波で海底が干上がり、水たまりで魚がぴちゃぴちゃと跳ねている光景を見た人がたくさんいたそうです。それなのに、それが津波の前兆現象であることに気づかず喜んで魚を捕っていたというのです。しかし、「世界津波の日」が制定されたことによる影響は大きかったですね。国連のユニタールという組織のメンバーとの共同訓練や、フィジーや周辺の島国の大学生に対する「稲むらの火」についての講演などで、世界各地に「Goryo's Spirit（濱口梧陵より受け継ぐ精神）」が広がっています。梧陵さんの物語には、伝統的知識や先人の警鐘を伝える力が備わっているのです。

最後に未来へ向けてのまちづくりに関してどのようにお考えですか？

外から来られた方、特に防災活動に携わる方々に驚かれるのが「避難道」と書かれた標識なんです。避難場所へのルートを示した大きな矢印も描かれていて、ところどころの家の壁などに貼り付けているんですが、こういう景色はほかにはないと。この町の人たちにとっては見慣れたものだけれど、身近すぎると気づくことができないのかもしれません。いろいろな方が「稲むらの火」について取り上げてくれているように、まちの中でも意識を高めていければと思います。梧陵さんの存在と物語、祭り、防災に関するまちの取り組みなど、すべてがつながり、防災意識が積み重なっていくことが望ましいですね。

当時の広村は突出した産業のない村でした。それでも梧陵さんは和ろうそくの原料となるハゼの木を植えて堤防の維持費に充てるようにと、先を見越したまちづくりをしてきました。子どもたちには、梧陵さんの物語だけでなく、その精神もこれから先ずっと誇りに思っていてほしいです。津波被害という悲しい話でもあるのですが、これからも伝え続けていきたいと考えています。

津波防災教育センター内ではゲーム感覚で学べるコーナーや世界津波の日に関するパネル展示なども。

日本文教出版『小学道徳　生きる力　4』には稲むらの火祭りを題材にした「お父さんのじまん」を、『中学道徳　あすを生きる　3』には「『稲むらの火』余話」を掲載しています。

特別寄稿

もう一歩先のイマジネーションを膨らませて考える道徳

―指導者用デジタル教材の活用から見えたもの―

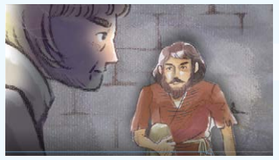
東京都板橋区立成増ヶ丘小学校主幹教諭　川田 聡子

1 教材との出会い

私が道徳について学び始めて最初に出会った言葉があります。それは、「教材提示に命を懸けろ！」というものでした。児童が教材と出会う時間が道徳の授業で最も大事であるとも教えていただきました。その出会わせ方はさまざまです。教師の範読はもちろん、紙芝居やペープサートといった工夫を多くの先生方が実践されていることでしょう。私自身も「今日はどのように出会わせようかな。」と常に考えています。

その手段の一つとして、プロによる朗読音声の活用が挙げられます。普段、聞き慣れた教師の声、間、表情とは違ったよさがここにはあります。教材に適した朗読は児童をぐっと教材に引き込む力があると実感しました。また、音声が流れている間、教師は児童一人ひとりの反応や表情をじっくりと観察することができます。朗読後には、その余韻とともに語りかけるように発問に入ることを意識しています。また、朗読音声にはいくつかの機能があり、児童の実態に合わせて選択することができます。朗読の速さや間など児童の反応を見ながら調整していくことで、より効果的な教材との出会いが実現されると思います。

さらに、教材を効果的に提示する機能として、アニメーションが挙げられます。例えば、５年「うばわれた自由」では、BGM付きのアニメーションが収録されています。教材提示のときは、児童がいつも以上に食い入るように画面をじっと観て、高い集中力を保ったまま、教材に入り込むことができました。また、教材と自分とを切り離して考えるのではなく、あたかも目の前で起こっているできごとであるかのような錯覚に陥り、児童の共感する心が強く働いたように感じました。アニメーションは、教室にいる児童と教材の世界をつなぐ効果があります。それこそが「教材の世界に浸る」ということではないかと考えます。ジェラールやガリューが実際に動きながら言葉を発する様子はもちろん、BGMも効果を発揮していると思います。ジェラールが勝手気ままに振る舞っている場面と、ろうやで語る場面とではBGMが切り替わっています。その雰囲気を直感的に感じ取ることが、後の発問場面でも大いに生かされていたと確信しています。



教師自身が範読することは、児童にとって大切な時間となります。ただ、そればかりに固執せず、柔軟に考えてデジタル教材を活用することも、児童のイマジネーションに刺激を与える新たな手だてであると私は考えます。

2 リアルを伝える画像の力

道徳の教材は、さまざまなジャンルからできています。定番の読み物教材もあれば、実際のできごとや歴史上の人物を取り上げているものもあります。児童がより教材に入り込み、考えられるようにするには、いくつかのポイントがあります。範読をした後、扱う教材の概要が児童にしっかりと理解されていなければなりません。教材の時代背景や登場人物の関係について十分理解されていないまま発問をしても、児童は戸惑うばかりです。

そこで効果的なのが、画像です。場面絵を印刷して黒板に貼り、構造的な板書を作り上げることは実践されている方が多いと思います。加えて「特にこの場面が重要だ。」と考える場面絵は、画面に映し出して印象付けることも効果的です。範読後には教科書を閉じていることが多いので、大きく拡大された場面絵があるだけで、児童は思考しやすくなります。

また、画像を使うタイミングは範読をする前の場合もあります。６年『杉原千畝 －大勢の人の命を守った外交官－』では特に効果的でした。この教材を使った授業は、社会科で杉原千畝についてのコラムを読んだ後に行ったので、彼がリトアニアで外交官を務めていたことを、児童は知っていました。そこで私は、導入で、教材への関心を高める工夫を凝らしました。単純に杉原千畝の画像を出すこともよいかと思いましたが、デジタル教材に収録されているリトアニアの旧日本領事館の画像は児童の教科書には掲載されていない画像でしたので、これを使わない手はありません。

実際の授業では、付箋機能を使って、画像の説明を隠した画像を提示し、「ここはどこでしょう。」と問いました。さっぱり見当が付かない児童の様子を見て、付箋を剥がし、「リトアニアの旧日本領事館（現在は杉原千畝記念館）」という説明を表示すると、教室のあちらこちらから、「あ！社会でやった！」「思った感じと違う。」「今日は杉原千畝の話ですか。」と声が挙がりました。たった一枚の画像で一気に児童を教材と結び付けることができたのです。

さらに、リアルが伝える画像の力を感じたのは、６年「団地と子犬」の授業でした。範読後に「松山市立潮見小学校のダンの銅像」の画像を見せました。これも教科書には掲載されていません。画像を見せた瞬間、大きな歓声が揚がったことに私自身も驚きました。展開後段で「きまりは何のため、誰のためにあるのだろう。」と問うと、いつもより深く自分のこととして考える姿が見られました。きっと、画像を見たことで実際の話なのだとわかったのも影響していたのではないかと推測しています。

このように、実際の画像は何を語るよりも、児童のイマジネーションを強く働かせる効果を発揮します。また、教科書には載っていない、授業づくりに役立つ画像をデジタル教材から探し出す作業も、私自身のイマジネーションをくすぐるものがあります。「この一枚をどう生かそうか。」この視点は、非常に重要ではないでしょうか。

3 語る教材、それこそが児童の心を揺さぶる

児童にこんな質問をしたことがあります。「6年生で学習してきた道徳のお話の中で、心に残っているものは何ですか。」卒業前でしたので、ほとんどの教材を扱った後のことです。その学級では、第１位が「それじゃ、ダメじゃん」、第２位が「上村さんのちょうせん －ひさい犬と共に－」、そして第３位が「ロレンゾの友達」でした。「ロレンゾの友達」は、自分の考えと友達の考えを比べて、たくさん話し合ったからという理由が挙げられていました。つまり、授業の内容として心に残っているということです。しかし、あとの二つは、動画を見たことがたいへん印象的だったという理由がいくつも挙げられていました。中には、「ご本人からメッセージをもらったことがうれしかった。」という理由を挙げる児童もいたのです。

「それじゃ、ダメじゃん」の授業では、展開後段に入る直前で、「実はこの方からメッセージをもらっています。」と話して、春風亭昇太さんからのメッセージ動画を流しました。真剣に耳を傾けている児童の姿を今でも覚えています。この時間のねらいとする価値に迫るための最高のアシストでした。導入で「自分のよさなんてない。」と発言していた児童が、これから伸ばしたい自分のよさについて、頭を悩ませながらも自分のこととして考えられたことが、動画を見せた成果だったと思います。

「上村さんのちょうせん －ひさい犬と共に－」では、動画を２回見せました。１回目は、じゃがいもの訓練の様子。第一発問の前に、どれだけ大変なことをやってきたのかを目で見て確認することができました。２回目は、上村さんのメッセージ。中心発問をし、児童が話し合った後に、「皆さんも何かできることにチャレンジしてみてくださいね。」というメッセージを視聴した流れで、展開後段へと向かいました。チャレンジしてみようと誰に言われるよりも、教材の中の上村さんに言われることに意味があると感じました。

教材の中の人物がメッセージや思いを語っている動画は、授業づくりをするうえでたいへん重要であり、その効果は絶大です。どのタイミングで流して、何を考えさせたいかを熟考しながら、動画の内容を吟味し、授業を組み立てていくことが、授業づくりの面白さであると私は感じています。

4 デジタル教材との付き合い方

道徳の授業には、たくさんの仕掛けが必要であると考えます。そして、その仕掛けの目的は、道徳科の目標の達成にあります。児童が、その時間にねらいとする道徳的価値について考えることができるか、さまざまな見方や考え方をすることはできるか、よりよい生き方について考えることはできるか。それを授業者自身が問い続けながら授業づくりは進んでいきます。

現代は、その道のりの途中に、デジタル教材がたくさん散りばめられています。どれを拾って、どこで生かすかを考えることは、授業者として実に楽しい作業です。児童の中にはもともと素晴らしい想像力が秘められています。そのもう一歩先のイマジネーションを、デジタル教材によって膨らませてみませんか。きっとさらに真剣に、そして深く考える児童の姿に出会えるのではないかと、いつも期待を膨らませています。

第19回 見てわかる！道徳

道徳の学習における応用編です。基本となる22の内容項目は、それぞれ独立しているわけではありません。
それらは密接に関わり合い、また競合する場合もあります。
ここでは、内容項目間の関係をわかりやすく解説し、道徳的価値の本質やおもしろさに迫ります。

今回のテーマ

「友情、信頼」
「規則の尊重」（小学校）
「遵法精神、公徳心」（中学校）

監修：広島大学名誉教授　越智 貢
共著：南山大学教授　奥田 太郎

「考え、議論する道徳」とは、いったいどのようなものなのでしょうか。友情と規則をめぐる周知の問題を例にとって説明することにしましょう。

友情と規則尊重のジレンマ？

「これ、校則違反だけど、先生に言わないでね、友達でしょ？」自分が友達だと思っている同級生にそう言われたとき、あなたはどうするでしょうか。その同級生との「友情」を大切にして、校則違反を見過ごすでしょうか。それとも、「規則の尊重」を大切にして、校則違反を先生に報告するでしょうか。どちらを選ぶにせよ、重要なのはどうすることが道徳的に正しいかということです。

約束や決まりを破ることは、正しいことではありません。校則違反を見過ごすなら、違反と知りつつ黙認するのですから、あなた自身も不正の共犯となるでしょう。しかも、違反を見過ごすことは、その同級生のためになるともいえず、とすれば見過ごすことが本当に友情の証（あか）しなのかは疑わしく思えます。むしろ「駄目なことは駄目だ」と伝えることがその同級生との友情の証（あか）しだと、ひとまずいうことができるでしょう。

では、違反を先生に報告することが常に正しいということになるのでしょうか。話はそう単純ではありません。

同級生の「友達でしょ？」という発言を気にかけず、何の迷いもなく、その同級生を規則に従わせるために先生に報告するとしたら、あなたの行為は正しいとはいえないかもしれません。規則だからそれに盲目的に従うという姿勢は、何も考えていないのと同じです。最近では、生徒の自由を奪うばかりの管理的な校則を「ブラック校則」として問題視する動きがあるように、今問題になっている校則がはたして尊重するに値するものであるか否かを十分吟味する必要があるでしょう。それを欠いた振る舞いが道徳的に正しいことといえるはずはありません。

このように、学校生活で多くの生徒が時折直面するありふれたできごとの中にも、道徳的な正しさをめぐる厄介な問題が含まれていることがわかります。

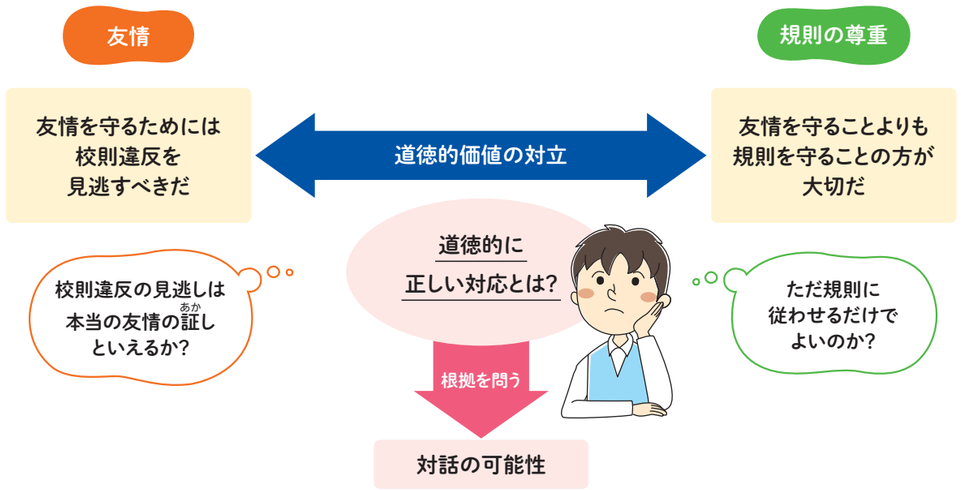


図１　友情と規則の尊重のジレンマ？

友情―校則違反の理由を問うこと

あなたが前出の同級生と友達であるのなら、あなたはその同級生に対して、「どうして校則違反をするのか」と、その理由をたずねたくなるはずです。反対に、その同級生はあなたに対して、「どうして校則違反をしてはいけないのか」とたずね返すこともあるでしょう。もしこうした問いかけがお互いから出せない状況だとすれば、あなたとその同級生の間にある関係が本当に友情なのかどうかを再考すべきかもしれません。なぜなら、自分の思い通りにしてくれることが友情の証（あか）しだとして、特定の行為を強いて相手を支配しようとすることもあるからです。いじめを行っているにもかかわらず、加害者は「楽しく遊んでいる」と思い込んでいたという報告があるように、友情と支配が混同されていることは決して珍しくはありません。

本当に信頼し合っている友達なら、校則違反をすることには何か理由があるに違いないと相手のことを考え、そのことについて対話が始まるはずです。問いかけられた側も、自分がそうする理由を相手に説明したくなるでしょう。

友情―規則について対話すること

通常、規則を尊重するのは当然のこととみなされています。それゆえ、規則や校則を真剣に問い直すことはそれほど容易なことではありません。友達の間柄だからこそ、率直に校則違反について対話ができるというべきなのでしょう。

そもそも、規則は、事の運びを円滑にして、人々に自由を保障するために使うこともできますが、同時に、問題を起こさせないための規制的な規範として、人を従属させるために用いることも可能です。それゆえ、その規則に従う理由を確認しておくことがなければ、人々に盲目的な服従を強いるおそれが出てきます。遵法精神や公徳心は、規則を尊重すべき理由を問い合えることなしには成立しないといっても過言ではありません。

同級生の「先生に言わないでね、友達でしょ？」という言葉は、こうしたことを考える入り口でもあります。一見ジレンマとも映る、友情と規則をめぐる状況は、「考え、議論する道徳」を実現する場ともなり得るのです。

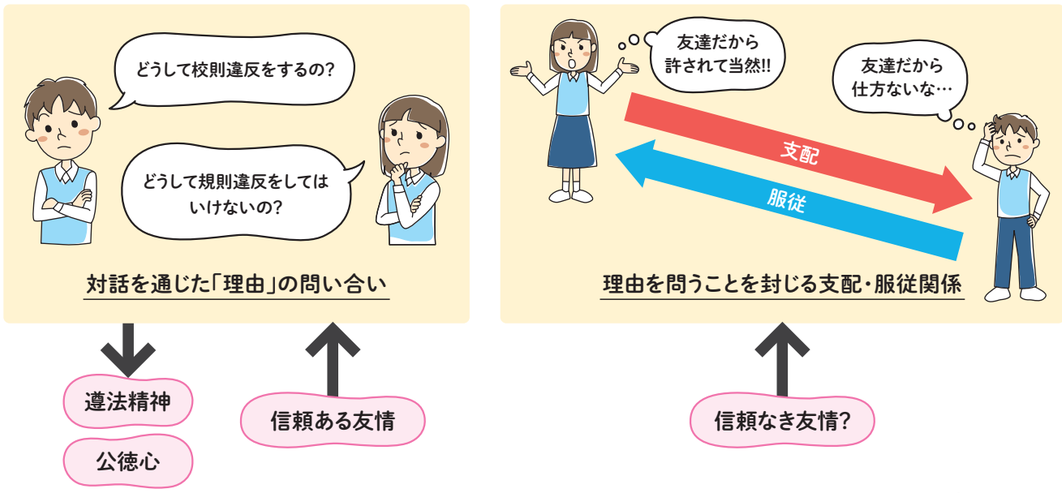


図２　信頼ある友情がもたらすもの

実践事例
小学校
4年

正直
～自分に負けない強い心を育てる～

京都府京都市立桂坂小学校教諭　神山 庄太

教材名	「新次のしょうぎ」 （『小学道徳　生きる力　4』日本文教出版）
内容項目	A「正直、誠実」
主題名	正直に生きるために
ねらい	正直でいることのよさや難しさに気づき、正直で明るく生きようとする態度を養う。
教材のあらすじ	新次は、伊三郎おじさんとの将棋の勝負で、自分の勝ちたい気持ちを押さえることができず、ごまかしをしてしまう。新次は、雨の中を帰りながら、自分のしたことを後悔し、涙を流す。

① はじめに

本学習の内容項目は、A「正直、誠実」で、中学年では、「過ちは素直に改め、正直に明るい心で生活すること」となっています。

正直でいることは、自分らしく、自分に自信をもって明るく生きるためにとても大切なことです。誰もが「正直でいなさい。」と先生や家の方から教えられて育ってきたことでしょう。それは、今を生きる子どもたちも同じです。しかし、その教えが観念的な理解にとどまってしまっていると、まだまだ生活経験が未熟な子どもたちは、しなければいけないことができなかったり、叱られそうになったりしたときに、ついついうそをついてしまうものです。

４年生くらいになると、その場の状況に合わせて知恵もついてくるので、他人にばれないようなうそをつくこともあるでしょう。ただ、そんなときも、一人だけ本当のことを知っています。それは、うそをついた自分自身です。正直でいられなかった自分には、後悔や自責の念があるため、もやもやした気持ちが出てきます。自分で“うそつき”というレッテルを自分自身に貼ってしまっては、自信もてません。他者に対してもそうですが、まず自分自身に正直でいられないことには、自分らしく、自分に自信をもって明るく生きることはできません。だからこそ、出来心からうそやごまかしをしてしまったとしても、素直に過ちを認め、次の自分につなげていくことで、うそやごまかしをしてしまうような弱い自分に負けない心を育てていくことが大切です。

② 教材と授業のねらい

「新次のしょうぎ」に出てくる新次も、どうしても将棋の勝負に勝ちたくて、つい不正をしてしまいます。勝負ごとに勝ちたいという新次の気持ちや不正を働いてしまった新次の人間的な弱さ、そして、良心の呵責（かしゃく）と自責の念に苛（さいな）まれる新次の思いは、子どもたちにとっても共感しやすく、これではいけないと考えさせられるすてきな教材です。

そこで、本学習では、新次の気持ちに寄り添いながら、正直でいられることのよさや難しさを実感的に理解できるようになること、そして、何よりうそをついてしまいそうな自分に負けない強い心がもてるようになることを願い、授業を実践しました。

③ 授業の工夫

（1）導入

考えたい！ 話し合いたい！ と子どもたちが思えるような授業にするために、導入を工夫することは大切です。授業の入り口である導入で、明確な課題意識をもたせ、主体的に学習に取り組む態度を引き出すことができれば、道徳の授業がよりよくなると考えています。

今回の授業実践では、「正直に生きることが大切だと思う人？」と尋ねました。すると、全員が挙手しました。その後、そのわけを子どもたちに聞きました。ここまでは、一般的な導入ですが、ここで「正直に生きることは大切なのですね。でも、うそをついてしまったことがある人？」と尋ねるのがポイントです。「わあ！」と声をあげ、にこにこしながら、手を挙げる多くの子どもたち。理想をわかってはいるのですが、人間的な弱さから、そうならない現実についても自覚できています。「あらら、正直でいるのは大切だとわかっているのに、うそをついちゃうときもあるのですね。」と投げかけると、子どもたちの頭の上には、「どうしてうそをついてしまうのだろう？」「正直でいるためにはどうしたらいいのだろう？」というクエスチョンが自然と浮かび上がってきます。

ここで、「正直に生きるために大切なことを考えよう。」とめあてを提示することで、共通の課題意識が生まれました。このように、理想と現実との「ギャップ」を生かすことで、考える必然性が生まれ、きれいごとで終わらない道徳の授業になると思います。

（2）展開

先ほどのように、子どもたちは、正直が大切であるということは、頭ではわかっています。しかし、わかっているのにできなかったという矛盾はよく生じます。子どもたちの道徳性が、望ましい道徳的実践として、内から外に引き出されるようにするために、自分ごととして実感的に理解させていくことが大切です。そのようなことから、本授業では、役割演技を通して、新次の気持ちに寄り添い、実感を伴った理解ができるように工夫しました。

本教材で、「おじさんが、お客さんの相手をしているすきに、ふっと新次の心に、あくまのかげがさした。」という一文があります。その悪魔のささやきは、紛れもなく、新次の弱さです。もちろん、新次にも良心があるので、不正をする前には、よい心と悪い心の葛藤を抱えていたはずです。ここで、役割演技を取り入れ、新次の心の中の天使と悪魔に分かれて、二人ペアで演じました。

A（天使）「ずるをして勝ってもうれしくないよ。」
B（悪魔）「いやいや、負けるほうが嫌だと思うよ。」
A（天使）「ばれたら、おじさんもがっかりするよ。」
B（悪魔）「いやいや、ばれなければいいんだよ。」

教室のいろいろなところで、このようなやりとりが活発に行われました。これらのやりとりを聞いていると、子どもたちは自己を見つめながら、今までの生活経験をもとにして考えているのがわかります。

この後、役割を交代し、反対の側面からも考えることで、正直でいることの難しさとよさの両面があることに気づけるようにしました。

ペアで活動する役割演技をすることで、考える時間が多くなります。また、演じることに恥ずかしさを感じる子どもにとっても、自分を見つめて、考えられるよさがあります。

全体の前でも２、３グループの子どもたちが役割演技をしました。真ん中に座るのは、新次役で、聞いていてどう思うかについて感想を話します。多様な意見が出てきて、考え方を広げたり、深めたりすることに役立ちました。

次に、雨の中、傘を差す新次の挿絵を拡大印刷して、その表情にじっと注目させました。子どもたちはすぐに、雨ではない涙が出ていること、新次が何とも言えない悔しそうな表情をしていることなどに気づきました。

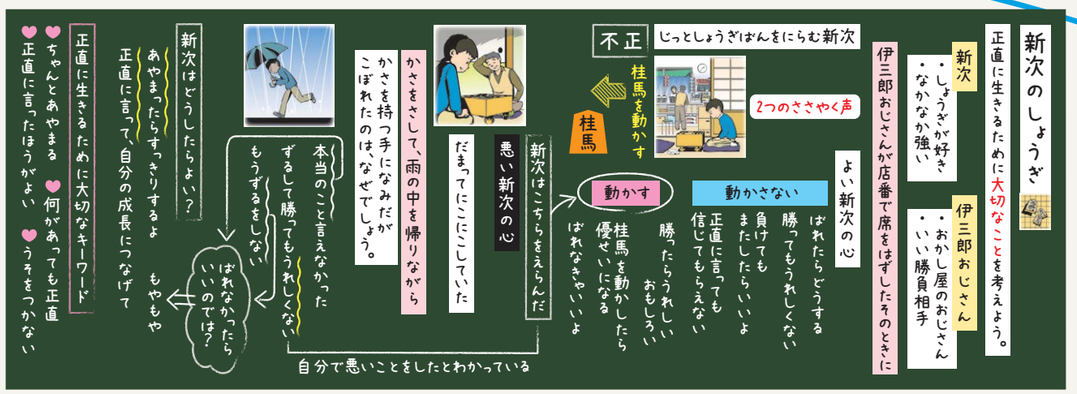
そして、正直についての考えをさらに深めていくために、「傘を持つ手に涙がこぼれたのは、なぜでしょう。」と発問しました。挿絵から発問につなげていくことは、その状況や立場を考えやすくなるため、効果的です。

畿央大学大学院教授
島 恒生 先生から

「考え、議論する道徳」は、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の視点です。受け身の学習ではなく、子どもたちが自分を見つめながら、道徳的価値に対する見方、考え方を深めていく授業です。神山先生の目指す「考えたい！ 話し合いたい！ と子どもたちが思えるような授業」です。

その実現のためには、学級経営をはじめさまざまな工夫がありますが、最近は、授業の導入で「めあて」を設定することが増えています。神山先生は、「めあて」が子どもたちのものになるよう共通の課題意識をもたせ、授業の軸としています。素晴らしいことです。「めあて」があることで、登場人物の心情理解に偏らず、道徳的価値に関わる議論にできることもメリットです。

	学習活動（◎中心発問、〇基本発問、・予想される児童の反応）	◇指導上の留意点
導入	**1 正直に生きる大切さについて考え、今まで自分がそのようにできたかを振り返る。** **〇どうして正直に生きることは大切なのでしょう。** ・正直に生きないと気持ちよくない。 ・うそをつくと、自分がもやもやする。 **〇今までにうそをついたことはありますか。** めあて 正直に生きるために大切なことを考えよう。	◇正直に生きることは大切であるとわかっていても、なかなかそうできない場合があることを理解し、本時の価値への方向づけを図る。 ◇ねらいとする価値について共通の課題意識をもって考えられるように、めあてを黒板に掲示する。
展開	**2 教材「新次のしょうぎ」を読み、話し合う。** **〇伊三郎おじさんが店番で席を外したそのときに、新次の心には、どんなささやきが聞こえてきたのでしょう。** 悪い新次の心：・勝ちたいんだろ。・今なら動かせるよ。・ばれなければいいさ。・このままじゃ負けるよ。 よい新次の心：・それは悪いことだよ。・正々堂々と戦おう。・それで勝ってもうれしくないよ。 **◎傘を持つ手に涙がこぼれたのは、なぜでしょう。** ・本当のことを言えなかったから。 ・謝ることができなかったから。 ・ばれたらどうしようと思ったから。 ・好きな将棋が楽しくなくなったから。 ・ずるをして勝ってもうれしくなかったから。 ・もやもやが残っているから。 ・自分が悪いことは、自分にはわかっているから。 ・自分が許せなくなるから。 **〇自分の正直にできてよかったことを思い出しながら、新次にアドバイスをしてあげましょう。** ・謝って、次から正直でいよう。 ・勝ちたいのはわかるけれど、次からは自分の弱い心に負けないで。	◇挿絵を掲示したり、キーワードを掲示したりすることで、あらすじが一目でわかるようにする。 ◇心の中の、悪い新次とよい新次に分かれて役割演技することで、自分との関わりの中で考えられるようにする。 ◇児童の反応に対して、問い返しをすることで、ねらいとする道徳的価値に迫れるようにする。 <考えを深めるための問い返し例> 〇ばれてないなら、謝らなくてもいいんじゃないかな。 〇ずるをして勝ってもうれしくないのはどうしてだろう。 〇もやもやが残っていると、どうしてよくないんだろう。 ◇自分を見つめ、正直にできたときのことを想起し、正直に生きるために大切なことに気づいたり、正直に明るく生きていこうとする気持ちを高めたりする。
終末	**3 本時の学習を振り返り、正直に生きるために大切なことについて考え、ワークシートに記述する。**	◇正直に生きるために大切なことについての自分なりの納得解をもち、端的なキーワードにまとめさせることで、日常生活での道徳的実践につながるようにする。



発問に対しては、子どもたちからは、「謝れなかったから。」「ずるをして勝ってもうれしくなかったから。」などの反応がありました。そこで、「ばれてないなら、謝らなくてもいいんじゃないかな。みんなはどう思う？」と問い返すと、自然と横を向いて友達と話し合いが始まりました。そして、「もやもやが残る。」「自分が悪いことは、自分にはわかっている。」「自分が許せなくなる。」と自分の弱い心に負けることが、どれだけ自分を苦しめるのかについて理解を深めていました。

この教材では、新次が道徳的な行為や行動をしたわけではないので、どうしても人間的な弱さの部分ばかりに焦点が当たってしまいます。そのため、うそやごまかしはよくないことだという考えだけで終わってしまうことが考えられました。その考えも大切ですが、私は、弱い自分に負けない強い心をもってほしいという願いがあったので、自分の正直にできてよかったことを思い出しながら、新次にアドバイスをするという活動を取り入れました。その道徳的価値のよさをいかに理解するかが、弱い心に負けない強い心（良心）を育てるためには大切だと考えたからです。

「私も謝ったらすっきりしたことがあるよ。新次くんも頑張って。」「負けたとしても、ごまかしをしないで勝負するほうが、気持ちいいよ。自分の成長につなげるために、謝ろう。」と新次に優しく語りかける子どもたちの姿がみられました。今までに正直にできた体験を思い出しながら、正直のよさについても考えることができました。

（3）終末

最後に、授業のめあて「正直に生きるために大切なこと」について振り返りました。私は、いつもめあてに対する自分なりの納得解を端的なキーワードにまとめ、自分の思いを話させるようにしています。短いキーワードは、自分が生きていくうえで大切な言葉として、心に刻まれたり、自分のそばに置いておいたりしやすく、日常生活での道徳的実践につながるように思うからです。自分で「座右の銘」をつくっていると言ってもいいのかもしれません。子どもたちは、「何があっても正直」「正直は、自分の成長につながる」のように、それぞれが正直に生きるために大切なことを考えていました。

授業が終わり、ワークシートを集めながら、「新次くんは、この後どうなったのかな？」と尋ねました。「そりゃあ、ちゃんと謝れたよ。」と言う子どもたち。失敗しても、そこから立ち直れる強さがあることをみんなが信じていました。私も、よりよく生きようとする心を、どの子どもたちももっていることを信じなければと、改めて教えられた気がします。

畿央大学大学院教授 島 恒生 先生から

小学校中学年の内容Ａ「正直、誠実」は、学習指導要領解説にもあるように、「自分を偽らない」がポイントです。低学年は、うそをつくともやもやする、正直だとすっきりする、だから正直が大切だという段階ですが、中学年は、このもやもや感の中身に焦点を当てます。そうなると、自分の心の中を見つめることが大切です。そのためには、自分の心の中で、うそつきの心と正直な心が綱引きをしているイメージをもたせるといいですね。

終末の「自分なりの納得解を端的なキーワード」もよい取り組みです。道徳科における納得解は、行いや行動レベルの解決策ではなく、道徳的価値の大切さの理由に関する納得解と考えるといいでしょう。「座右の銘」は子どもたちの人生を豊かにします。

こんなコト、聞いてみました！

ちょっと聞いてみたいギモンに経験をもとにお答えいただきました。
授業のヒントになったり、励みになったり。
これからの道徳の授業に生かせる何かが見つかるかもしれません。

今回のテーマ

授業１時間内での、時間配分の工夫は？

終末の時間を必ず確保しよう！

東京都板橋区立赤塚第二中学校校長　木村 知広

道徳科の授業を進めるに当たっては、その特質を踏まえて、学習指導要領解説にある「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習」に意を用いる必要があります。

また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けては、「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める」こと、「学びの過程の中で、（中略）問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりする」ことなどの視点を大切にした授業を進めるのも大切です。

以上を踏まえて１時間の授業を構想する際は、まずねらいを達成した子どもの具体的な姿を想定し、どのような活動や思考をたどればその姿に到達するのかをゴールから逆算して計画することが大切です。ねらいを達成した姿は、主に授業の後半や本時の学習を振り返る過程などで表出されることが多いため、終末の時間を確実に確保することが大切になります。

そこで、授業１時間内での、学習過程の時間配分は次のように工夫していきます。

①導入の工夫

導入では、主題に対する生徒の興味や関心を高め、学習への意欲を喚起させることが目的です。そのため、本時の主題に関わる問題意識をもたせる導入や教材の内容に興味や関心をもたせる導入、本時の学習への見通しをもたせ、みんなで考えていこうという雰囲気を醸成する導入などが考えられます。しかし、**その後の展開・終末の時間を確保する観点から５分以内**とし、時間をかけすぎないようにしなければなりません。

②展開の工夫

展開は、ねらいを達成するための中心となる段階であり、中心的な教材によって、児童生徒一人ひとりが、ねらいの根底にある「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野で）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める」段階です。

ねらいを達成するためには、中心発問を契機とした活発な対話や議論、教員の問い返しによる教師と生徒、生徒相互の対話など、対話的な学びを通じ児童生徒の見方や考え方の高まりを促すことが重要です。そのため、**中心発問を契機とした対話的な学びには２０分程度**の時間を確保し、課題に応じた活発な対話や議論となるよう工夫する必要があります。

一方、展開では、教材の範読などによる教材理解や、基本発問などの時間も必要となってきますが、この活動に時間をかけ過ぎてしまうと、対話的な学びの時間や終末の時間を確保することが難しくなります。導入を５分、対話的な学びを 20 分とすると、**教材理解及び基本発問にかけられる時間はおよそ 15 分程度**と考えなければなりません。そのため、教材理解に時間がかかる場合には、教材を事前に読ませることや、範読前に登場人物の関係性などを紹介すること、範読後に場面絵を活用することなどのさまざまな工夫を通して、児童生徒が教材の内容をしっかり把握できるようにすることが大切です。また、この教材理解を効果的・効率的に行うことができれば、基本発問の発問数を減らすことにもつながり、ひいては、**展開全体を 35 分程度**とすることにもつながります。主体的な学びの視点からも、終末の時間は必ず確保すべきで、展開にかける時間管理には特に留意が必要です。

③終末の工夫

終末は、ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、今後の発展につなげたりする段階です。ここでは、本時の学習を通して考えたことや新たにわかったことを確かめたり、これからの思いや課題について考えたりすることが必要となります。そのためには、自分自身と向き合いながら思考を深め、考えを整理するための書く活動を取り入れることが大切です。また、学んだことを互いに共有する活動、教師の説話などが考えられることから、**5分から10 分程度**の時間を確保することが大切です。

地球の仲間からのメッセージ

獣医師、元大阪市天王寺動物園長
長瀬 健二郎

フタコブラクダ

ラクダ

私たちヒトは哺乳類に属します。哺乳類の特徴はいろいろありますが、その一つに恒温性があります。体温を一定に保つことができるということです。そうすることで、さまざまな体内の代謝を安定して進めることができるのです。気温が低いから体温が下がってしまって活動が遅くなる、あるいは止まるということはありません。が、中には体温を一定に保たない哺乳類がいます。そのひとつがラクダです。

ラクダにはコブが二つのものと一つのものがいますが、どちらも暑い時期には日中の気温は 50℃にも迫ろうかというきわめて過酷な場所に生息しています。普通の哺乳類は体温を上げ過ぎないよう、汗をかいたり呼気から水分を蒸発させ、そのときに奪われる気化熱によって体温を一定に保ちます。しかし、こうするためには水分が欠かせません。けれど、砂漠では消失した水分をたやすく補うことはできないのです。そのような場所で暮らしてきたラクダの先祖は、体温を一定に保たないという戦略をとりました。暑くなれば体温も上げ、気温との温度差を少しでも狭めて水分の消失を防いだのです。それに加えて呼吸数も増やさず、尿も少なくし、フンに含まれる水分も可能な限り絞り尽くす、というふうにすべての面で水分の消失を防いでいます。こうして、哺乳類でありながら体温を 35 から 43℃の範囲の中で変動させているのです。

それだけではありません。ラクダは水を飲める状態になったときにも驚異的な能力を発揮します。70 から 100 ℓもの水を一気に飲むことができるのです。実験結果として 130 ℓも飲んだ例が報告されています。これは体重の 30％に匹敵する量だったそうです。ヒトは、体重の 12％の水を一気に摂取すると命に関わるとされています。急速に多量の水分を摂取することで血液が薄められた結果、赤血球が膨張して破裂してしまうからです。ラクダの赤血球は膨張に対する耐性が高いので、そんなことができるのです。

ラクダの砂漠への適応はほかにもあります。砂嵐のときに飛んでくる砂粒から目を守るため、まつげはつけまつげ以上の長さと密度をもっています。耳や鼻を守るため、周囲には長い毛が生えていますし、鼻の穴をピタリと閉じることもできます。また、足の裏には体重がかかると広がる肉球があり、砂の中に足がめり込まないようにできています。いつか動物園でラクダを見つけたら、そんなところにも注意して見てあげてください。